



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地球人の魁(さきがけ) : プロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか (W.Kowalski, "The Making of a Global Man. Who and What was B.Piłsudski?")
Author(s)	コヴァルスキ, ヴィトルト; 井上, 紘一//訳
Description	日本語訳と, 元の英語発表原稿を掲載しています。日本語訳(20/10/2013)英語版(20/12/2013)。この英語版は発表後に増訂されたもので、発表前に準備された日本語訳とは一部異なる場合があります。(Here are published: Japanese translation (20/10/2013)original English-language version (20/12/2013). Appendices are revised version after the lecture. They are partly different from the earlier Japanese translation.)
Relation	「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集全一冊 「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催: 北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催: グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力: 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53485
Type	conference paper
File Information	15Kowalski_rev.pdf, Japanese translation



地球人の^{さがけ}魁 ～ブロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか

彼はアイヌの習俗や慣習を強く抱きしめて、
彼らの許に己が子らの母も見出した。

ヴィトルト・コヴァルスキ 井上 紘一 訳

三十九才のブロニスワフ・ピウスツキがシアトル航路の米国船で横浜港を出航する1906年8月3日、彼が己の祖国と見做すポーランド・リトワニア同君連合へ向けられた日本人らの印象的な眼差しに、彼は思いを馳せていた。その祖国は、百年以上も前に近隣諸帝国が暴力的に山分けしてもはや存在せず、123年の長きにわたり地球の表面から完璧に消失していたのだった。1906年当時の日本の生徒らはどうやら、外部からの侵略に対して自らを守れぬか、あるいは守ろうとせぬ国家にありうる末路の範例として、ポーランドのことが教えられたようである。

ブロニスワフ・ピウスツキは、一人の若者として家庭ではポーランド語を話し、その想像力はポーランドのかつての輝かしい栄華にとっぷり浸かっていたから、ポーランドの亡国は彼の夢や渴望の基準点であった。だが、己の一生を通して自らをポーランド人と称したい者が、ドイツ（プロイセン帝国やオーストリア帝国）かロシアの市民権を受け入れることを強いられていた。ブロニスワフの両親はいずれも、リトワニアの一地方であるサモギティアの生まれであるが、彼らが生まれたとき、この地方はロシア帝国に併呑されていた。彼ら自身の両親の場合でも、状況は大差なかった。そこでもし、今日のお役所仕事の設定するような基準でピウスツキの国籍を云々するとしたら、ブロニスワフ自身もさることながら、彼の近い先祖たちまでが、少数派民族集団出身との添書きが付されて、ロシア帝国臣民に分類されるであろう。

1918年、ブロニスワフ・ピウスツキの死の僅

か数ヵ月後のことであるが、ポーランド国家は甦った。ポーランドは果たして、ブロニスワフを直ちに自国民の一員と主張し、彼を模範的なポーランド人愛国者と見做したであろうか。否、そのようなことはなかった。ポーランドの国家再興以降、ブロニスワフ・ピウスツキは忘却された傍流人物として扱われている。今日のポーランドは、お役所仕事と「省力原則」が、国営のメモリー・バンクに保存するに値する人物を決定するようなお国柄である。そして彼が今や一世にわたって世界にあまねく周知・尊敬されてきたのに、国内では国家が空世辞を弄するだけである。また彼の苗字はあまねく知れわたっているのに、彼の洗礼名は、その記憶を忘却から救うべく戦う一握りの熱血漢らが僅かに知るのみである。彼の業績たるや誰も何も知らず、ポーランドの首都ワルシャワの雑踏の中で、ブロニスワフ・ピウスツキについて何かを耳にしたことのある通行人と遭遇するためには、頗る老練で粘り強く——しかも人一倍強運な——研究者が必要となるだろう。

これは悲しい事態であるが、それはさらに悲しむべき追伸すら伴う。人をあれこれの国籍に振り分ける今日の公式便法によると、ブロニスワフ・ピウスツキには——彼の父母や祖父母たちがロシア国籍を有していたことで——ポーランドの市民権が付与されそうにないのだ。しからば、彼はむしろロシアの市民権を要求した方がよかったのかも知れぬが、それとても問題含みであろう。ブロニスワフ・ピウスツキは確かに青年期をロシアで過ごしたとはいえ、成人として公認される年齢に達する前に収監され、

彼は未成年者だったから、これらの権利を主張する——あるいは同事件で死刑が宣告される——には余りにも若過ぎたにも拘らず、死刑宣告を受けて市民権が剥奪された。多年にわたる懲役刑を勤めたあとで、これらの市民権の幾つかはその後に回復され、「農民」の身分が付与されたとはいえ、移動の自由と、居住の許される地域をめぐる厳しい制約は残された。ロシア帝国が彼の市民権の全面回復を決定する前に、ピウスツキは既にロシアを去っていた——1905年12月には帝国領から最終的に脱出している。帝国臣民としてのロシアとの公的かわりはこれを以て終わり、彼がロシア国境を再び踏み越えることはなかった。

今日、ブロニスワフ・ピウスツキを自国民と主張するロシアの熱烈なラヴコールは既に始まっている。数年前のことだが、ポスト・ソヴィエト期のある著者は彼を「ヴィドヌィ・ルースキー・ウチョヌィ」（「ロシアの著名な学者」）と記している。そのような評価はブロニスワフの眼に愚挙と映るだろうが、今日の世界ではそれが分類的思考の権力であるから、そのような記述がもしウィキペディアないし有象無象の「ペディア」に登場するならば、彼がそれを変更させる手立ては恐らくほとんどなかろう。事態を透視画法で眺めてみよう。筆者の母はヴォルヒニアの古い町ウツクで1911年に生まれたが、第二次大戦がヴォルヒニアにソ連支配をもたらす三十年以上も前のことだった。しかしながら、1945年以降の коммуニスト・ポーランドにおけるその生涯を通して、母の身分証には彼女の出生地が“USSR”（「ソ連邦」）と明記してあった。どれほど抗議を重ねたとしても、ポーランドの役所にこの目障りな記載を変更させるのはできぬ相談だったから、私の母親は統計から法律上のあらゆる用途にわたって、強力なソ連国家がそのような人々に対してなしうる、滑稽ながらも怖ろしい要求に怯えつつ、元ソ連国民として分類されていたのだ。

筆者の旧稿 “Noblesse Oblige” (K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, Saitama 2010 所収) では、ブロニスワフ・ピウスツキのさまざまな出自系統が議論されているが、そこにはルーシ国の建国者リ

ューリクにまで遡ることが歴史的に検証された家系もあまた見出される。民間信仰ではそのような家系が「ロシア人」と称されるのが通例であるから、ピウスツキは職業（学者世界）でもさることながら、先祖までもロシア人だったという今一つの誤解も生じえた。そうではない！まず第一にリューリクはスカンディナヴィア——Varang/Vareg——渡来の血統であり、キエフにおいてルーシの民を支配したが、この民は十中八九まで、今日のロシア人の先祖ではなかった。第二には、リューリクとブロニスワフの間に介在する二十世代余りを通して、リューリクの子孫らは忽ちリトワニア化され、のちにはポーランド化された。ブロニスワフの先祖たちは後者の二家系に由来する。この脈絡では、全ロシアのツァーリ、ヴァシーリー一世——1425年に死去——に由来するブロニスワフ・ピウスツキの出自は、既に取るに足らぬものとなっている。同帝の血がブロニスワフの血管に到達するまでに、サディズム的傾向が幾分緩和された先祖たちのお蔭で、それは十分に希釈されたからだ。

十代のピウスツキ少年は、強烈な反ロシア派だった。ヴィルノ第一ギムナジヤの生徒としては、ロシア人の生徒らを異なる血筋の人たちと見ていた。このアプローチに露わな敵意はなくて、あるのはただ自分が彼らとは異なるという確信だけだった。当時のヴィルノには地方の総督府が置かれていたが、それは、ブロニスワフのロシア人同級生の大半が、政府官吏らの息子たちであることを意味し、彼らはしばしば、自らがあたかも征服地で暮らすかのように振る舞った——それは遺憾ながら、事態の真実を反映するものでもあった。地方条例は、ブロニスワフのような生徒らに、校内ではお互いの間ですら、彼らの母語で会話することを禁じていた。この条例はその後さらに拡大適用されて、生徒たちは路上を友人や親族と歩くときでさえ、ポーランド語の使用は禁止された。それはつまり、ブロニスワフが屋外では、例えば、自分の従姉妹たちとも話ができぬことを意味した。彼女らは正規の学校に通学せず、そのためロシア語は全く話せなかったからだ。数ヵ月後には、規制のさらなる強化が導入されて、生徒らには友人

や親族の訪問も厳禁となり、彼らの相互訪問も午後8時までには制限された。

十七才のブロニスワフは、いまだ未刊行の「日記」の中でロシア人を、遅かれ早かれ不幸な結果を迎える「モンゴリアとモスコヴィアの混成民族」と形容した。彼はまた、ギムナジヤの校長が彼の過失を責めるときに、「貴様らはロシアのパンを食し、ロシアの市民権もすべて享受しておるのに、それでもロシア語を話すのは嫌なのか」と、よく叫んだことも回想している。

件の校長は極めて自明ながら、母語の使用禁止をロシアの過不足ない市民権の代償と見做していたわけだ。それは、件のポスト・ソヴィエト期の著者が先に述べたことと通底する心情だ。とはいえ、地元製のパン——たとえその一切れですら、正真正銘の「ロシア(のパン)」と称することはできなかったが——を食することは、ブロニスワフの著作がロシア語へ翻訳された結果、「ロシアの著名な学者」という肩書の候補に彼が推輓されること以上のロシア市民権を、彼に付与するものではなかった。

それは古典古代の「ロシアの著名な学者」——ペチャ・ゴラス——の事例をまさに想起させる。外部世界との遣り取りの中で、ロシア文化は頗る食欲でもありえて、他者の業績を好んで己のものとする主張する。筆者は極めて見識の高いモスクワの歴史家と付合いがあるが、彼はなんと、サンクト・ペテルブルグに在住するブロニスワフの——ピウスツキ姓の——従兄弟の一人は無線通信機の最初の発明者だった、と大真面目で断言したのだ。ソヴィエト期には次のようなジョークがモスクワの街を闊歩していた。問：最初の「ロシアの著名な学者」は誰だったか。答：もちろんペチャ・ゴラスだとも——この名は、古典古代ギリシャの著名な哲学者ピタゴラスの異名として通用していた。

若きブロニスワフが一度(ひとたび)、普通の人々と、彼らを蜘蛛の巣のように捕捉する帝国の統治機構とは峻別すべきことを学ぶや、ロシア人に対する彼の態度はかなり変化する。彼がサンクト・ペテルブルグ大学に入学する1886年までに、彼の想念——ますます革命的になっていったと言わねばならぬが——は既に、例え

ば、ブロニスワフの当初の夢であったポーランド国家の再興よりも、ロシアの普通の人々の福利により傾斜していた。その後のサハリン期ないしウラヂヴォストク期にはロシア人のあまたな受難者仲間を、彼は分隔てなく支援していた。ヨーロッパに帰還した1906年以降でさえも、もしロシアの当路の人たちが然るべき研究職のポストを用意するならば、ブロニスワフはロシアへ戻る余地も残していた。彼の書簡を繙くならば、そのようなポストが実際に用意された事実も知ることができる。彼がオファーを受け入れようとしなかった理由の一つは、公的旅行文書の不所持だったが、彼自身の説明によるならば、ロシアの旅券は、1906年の米国からヨーロッパまでの旅の途上で紛失したという。

しかしながら、その他の理由もあった。概して言えば、帝政の官僚主義に対する彼の態度は、ポーランドとロシアの生活様式における根源的懸隔を反映するものだった。ロシア人はヴァシーリー一世やイヴァン雷帝のような途方もない暴君であっても統治者として受け入れる用意があったのに、ポーランド人の方は、たとえ僅かな中枢的王権の強化ですら容赦しなかった。この懸隔は、国家論をめぐる解釈でポーランドとロシアが常に対決してきた、最も根源的な論点である。その発祥は恐らく、原ポーランド族[リャフ]からの二部族[ヴァティチとラヂミチ]の自発的離脱に遡るとみられ、両部族はおよそ1,100年前に東遷して、モスクワ川の河岸に新しい公国を建設した。この懸隔は今日に至るまであとを引いている。熟年に達したブロニスワフ・ピウスツキが、十代の強硬なポーランド愛国者のままだったことはありえぬが、この素朴なナショナリズムからの離脱は彼をモスコヴィア人、はたまたモスコヴィアの「学者」にさせたと解する余地は全くありえない。

さて、彼はもしポーランド人ともロシア人とも言いえないとすれば、ブロニスワフ・ピウスツキはドイツ人ではなかったろうか。この問いは、見かけほどありえない話ではない。拙稿の“Noblesse Oblige”では、ピウスツキ家の血管へドイツ人の血をもたらした多数の血筋が列挙されている。実際にも己をドイツ人と信じていたブロニスワフの祖先は、この千年間に数百名

はいたに違いない。彼はドイツ人の「血」を帯びていると述べたが、そこでは遺伝子だけに留まらず、慣習や信仰、事物の序列や他の民族——数例を挙げるとすればポーランド人、ロシア人、リトワニア人など——に対する態度までも含意されている。あるドイツ系家族との関係は、ブロニスワフが生きた時代に益々密接となって、彼が受けたゲルマン的習俗の影響はさらに強くなるであろう。

ブロニスワフが——系統を異にする純粹にドイツ系の——少なくとも三家族に由来し、これら三家族は 17, 18, 19 世紀を通して、彼の先祖に当たるピウスツキ家やビレーヴィチ家と、決まった間隔で通婚を重ねていたことが知られている。その後の 1830 年頃、バトラー家の二人姉妹がピウスツキ一族に嫁入りしたとき、ドイツ人遺伝子の明瞭な氾濫が彼らを襲う。姉妹の一人であるテオドラは、ブロニスワフの父親の生母となるであろう。今一人の姉妹エルジュビェタ(エリザベス)は、スギンティのヴォイチェフ・ミハウォフスキと結婚して、やがてブロニスワフの母方の曾祖母となった。ヴォイチェフとエルジュビェタは一人娘のヘレナをもうけて、ヘレナはアントニ・ビレーヴィチに嫁いだ。ヘレナは 1846 年に夭折するが、死因は定かでない。そのとき、彼女の一人娘のマリア——ブロニスワフの母親——は三才だった。

バトラー一族は、アイルランド・英国・サクソニー(ドイツ)・クルラント、そしてポーランドといった各国に根付いた、さまざまな分枝からなる汎ヨーロッパ的な家系である。ブロニスワフの先祖筋のバトラー家は、リヴォニアを経てリトワニアに到来したが、どうやらその前にサクソニーから渡来した分枝もあったらしい。彼らの記録された歴史による限り、バトラー族の習俗はドイツ的であり、日常の言語もやはりドイツ語だったことに疑うべき余地はない。19 世紀初頭にヴィンツェンティ・ピウスツキが、伯父の故ベネディクト・バトラーの遺産の相続を求めて訴訟を起こしたとき、故人はクルラントの陸軍中將であり、同国宰相の姉妹と結婚した事実が、裁判記録から端なくも明らかとなった。クルラントの公用語はドイツ語であるから、同国で行われた法律や慣習もやはりドイツの

それだった。彼らがその命運をブロニスワフの家族と重ね合わせるまでには、バトラー一族が近隣の社会に益々統合されてゆき、とどのつまりは、ドイツ語で *die Polnische Wirtschaft* (ポーランド経済) と称されるものを、己のそれと見做したであろうことは言うを俟たない。

ブロニスワフ少年の「日記」は、彼の家族生活に及ぼしたバトラー家の影響の大きさを如実に物語る。ヴィルノのブロニスワフの家には、ピウスツカ「ばあちゃん」か、ミハウォフスカ「ばあちゃん」——実際はブロニスワフの曾祖母——か、バトラー「じいちゃん」か、ビレーヴィチ「ばあちゃん」が、ほとんど毎日のように訪ねてきた。彼らの区々の姓に騙されてはならない。実際は、上記の四親族はいずれもバトラー家で生まれた兄弟姉妹である——但し些かややこしいことに、彼らの母親はビレーヴィチ家の出身だった。さらに言えば、これらバトラー家の兄弟姉妹——彼らは全部で 16 人もいた——の内の二人は、ヴィルノからほど遠からぬ田舎に住んでいたから、来訪の際はピウスツキ家のアパートに滞在することを常としていた。十代のブロニスワフは、もし毎日でなければ毎週ないし毎月、40 人余りの親族と接触したが、その過半はバトラー・コネクションを介して——父方か母方のいずれかの絆で——互いに結びついてもいた。

ピウスツキ家は最も広いアパートに住んでいたから、親族たちは彼らの客間で顔を合わせることが多かった。それぞれの集まりが散会するとき、ブロニスワフは、いずれかの「ばあちゃん」の帰宅に必ず付き添わねばならず、送り届けた先では招じ入れられて、お茶を啜り、彼女からゴシップや説教を聞きながら、半時間ほど過ごす破目に陥るのだった。彼はこれらの茶会の間、寝不足を取り戻そうと努めるも無駄であった。彼の「日記」には、「ばあちゃん」たちの垂れた「良き助言」を彼なりに整理した文章が、数頁にわたって書き連ねてある。この「助言」は——はるかに年上の人たちが垂れた助言は、世界中のティーンエイジャーが挙って忌み嫌うように——彼がそれをどれほど嫌ったにせよ、これらの頻繁な接触はブロニスワフ少年の生活に深甚な影響を及ぼしたに相違ない。

バトラー・コネクションはブロニスワフの両親の生活にも頗る大きな影響を与えた。ピウスツキ、バトラーの両家が領地を所有する幾つかの行政区では、地方条例が不法に施行され、ポーランド貴族の経済力を削ぐことが目論まれた。この条例は「1865年12月10日勅令」として知られ、不動産市場におけるカトリック教徒の取引を事実上禁止した。実際は土地の血統相続を認めるだけで、相続地は公開市場で売ることも、分割売却も一切罷りならぬことを意味した。ブロニスワフの家族に関する限り、同「勅令」はビレーヴィチ家とバトラー家の家系を介して相続した領地の所有を許容するだけだった。1880年代の初頭にピウスツキ家が家計不如意に陥ると、寡婦となったミハウオフスカ「ばあちゃん」——1894年に死亡——は、己の所有するスギンティの領地の権利をブロニスワフの母マリアへ譲渡する。領地は4,000 畝以上の土地を包摂するも、それがもたらす収入は、鰻上りに高騰するピウスツキ家の経常経費を賄うにも事欠く有様だった。

しかるに、ブロニスワフのドイツ・コネクションはバトラー一族に限られたわけではない。ブロニスワフが1906年にヨーロッパに戻ったとき、当時のガリツィア——オーストリア帝国の一地方——の首都であったクラクフに彼は居を定める。その統治者は、ドイツ人国家の神聖ローマ帝国皇帝なる称号を帯びる習わしで、ドイツ人の諸国家はもはやその呼びかけに呼応しないとはいえ、それはやはりドイツ人国家であって、公用語の筆頭はドイツ語、統治機構も各種土地法もドイツのそれであった。ピウスツキは1906年以降、ガリツィアの主要な文化中心地——クラクフを別にすると、それはルヴフとザコパネだった——を転々と移動した。彼はまたヨーロッパも手広く巡歴した。1914年、第一次世界大戦が勃発すると、ブロニスワフはガリツィアを離れてスイスへと向かう。彼はオーストリア旅券を帯びていた。

この旅券は彼をオーストリア・ドイツ人に変えたであろうか。われわれの信ずるところでは、以前に所持したロシア旅券が彼をロシア人にした以上のものではなかった。しかしながら官僚主義は、人々を腑分けする自前の手立てを有

するから、ブロニスワフはあらゆる意思や目的に関して、もはやロシア人ではなくてオーストリア人だった。もし誰かが1914年から1917年にかけてスイスに在住したオーストリア人の氏名を精査するならば、統計資料の中で必ずやブロニスワフ・ピウスツキと遭遇するであろう。

だが、われわれはそのような統計資料を信じるべきだろうか。もし「否」であるならば、もしブロニスワフ・ピウスツキを確実に——但し、統計的確度は担保されるかも知れぬが——ドイツ人、ロシア人、ポーランド人とは認定できぬならば、彼は一体、何者であったのか。ブロニスワフ・ピウスツキは多分、過不足なしのリトワニア人だったのだろうか。とどのつまり、彼が生まれ落ちた地方はリトワニアと呼ばれ、彼が思春期を過ごしたヴィルノは、リトワニア建国以来の首都である。彼の父は、ピウスツキ一族が中世初期のリトワニア統治者の末裔である、と繰り返し語っていた。物事がことほど左様に単純でありさえすればよいのだが……。ピウスツキ一族の伝説はむしろかなり割り引いて受け止めるべきである。1939年以前のヴィルノには、ごく僅かなリトワニア人しか住んでいなかったが、ブロニスワフの両親は、自らがリトワニア人であることを「承知する」傍らで、己をサモギティア人、即ち、ポーランド共和国の時代には独自の公爵領を形成していた、リトワニアの一地方の出身者と「見て」いた。往時の15-18世紀にはリトワニア大公国があって、今日のポーランド・ウクライナ・ラトヴィア・ベラルーシや、コヴノとヴィルノの周辺に建てられた歴史的には新しい国家——これが今のリトワニアである——を包摂していた。「往時」にはすべてが違っていた。まず初めに、国境なるものは皆無で、リトワニア大公国を構成するあまたの領邦——国ではない——があるのみ。その一方で大公国は、ポーランド王国とともに一つの大国を形成していた。この共和国の内部で、サモギティア伯爵領は独自のアイデンティティや、自前の行政機構と慣習を有していた。ブロニスワフの父は多分、国王領出身のポーランド人などの「外人」に対しては、不要な説明を避けるべく「リトワニア人」と自己紹介するであろうが、彼の胸の内では純粹無垢のサモギ

ティア人なのであった。

ブロニスワフは——サモギティアから遠く隔たり、リトワニア人と白ロシア人(ベラルーシ人)を分かつ文化境界に立地する——ズーウフの生まれであるから、己をサモギティア人とは見做さなかった、恐らくピウスツキ家で最初の人物であつたらう。だが彼はまた、己をリトワニア人とも考えなかった。リトワニア人とは、自前の言葉——ブロニスワフはそれを「途轍もなく難しい」言語と信じていた——を話し、別の社会層に属する人々のことであった。十七才のブロニスワフは「日記」に、リトワニア語を自分に教えるよう使用人の一人に頼み、この願望を守り通す誓いも立てた、としたためている。

彼は遺憾ながら誓いを守り通せなかった。しかしブロニスワフは、己の祖国の少なくとも大きな部分において現地住民が使用する言語を学ぶ必要を認めて、リトワニア語で書かれた最初の書物の出版に尽力した、16世紀の曾々…祖父ヴォイチェフ・ビレーヴィチの衣鉢を継いだ。ヴォイチェフは熱烈なプロテスタントで、信者らに対する主要な教義の伝授は現地語、即ちリトワニア語で行わねばならぬ、という信条の持主だった。

16世紀に、現地語で記された聖書を隣接する東プロシヤのつてを頼ってヴィルノへ持ち込んだのは、ヴォイチェフ・ビレーヴィチとその父エージェである。19世紀に、まさに同じルートで同様な書籍を国内へもたらす任を担うのは、彼らの末裔であるブロニスワフ・ピウスツキであった。しかしながら、一つの莫大な違いも介在した。彼のビレーヴィチ家の先祖たちは同事業を自由に何の障碍もなく実行したのに、ブロニスワフの方はこれらの書籍をドイツとロシア——ポーランド共和国を貪り喰らった二帝国——の、堅守された国境を越えて密輸せねばならなかったからだ。彼はそうすることで投獄や、恐らくはシベリア流刑の危険さえも冒したわけだが、それは、現地住民の根源的欲求に対処したのちに、社会的威信を享受することは初めて可能となる、という古い家訓への彼の執着でもあった。

密輸者のルートを整備する中で、ブロニスワ

フ・ピウスツキは青臭いリトワニア民族主義運動に対して産婆役を演じたが、同運動は結局、リトワニア人自前の独立国家を——四十有余年後に——もたらした。ブロニスワフ自身は、ポーランドから切り離されて自立するリトワニアの勃興は望まなかったが、自らの信奉する民族自決権をめぐる信条から、民族主義者たちを支援した。リトワニア民族主義者らに対する彼の協力の価値は、リトワニア語文献の発行が1887年頃に突如として衰退し、その供給が回復するまでにはかなりな時間を要した、という事実によって秤量できる。1887年は、ブロニスワフ・ピウスツキが逮捕され、リトワニアの大地から永久追放された年に当たる。

かなり端折って言えば、近代国家のリトワニアは、ビレーヴィチ家の人たちが上梓した最初の書物が端緒で、その後に東プロシヤからビレーヴィチ家の領地——当時はブロニスワフが所有していた——を經由して密輸された書籍から姿を現したのだ。ブロニスワフ・ピウスツキの記憶は現在、たとえ尊崇されていないにせよ、リトワニアの全域で少なくとも認知されている、と考えられるかも知れない。そうだ、その日はいずれ来るよ……、と人々は言う。ブロニスワフ・ピウスツキは尊崇されるどころか、リトワニアでは全く無名の人である。彼の名前に言及されることはほとんどない。少数の友好的なリトワニア人から然るべく支援された筆者が1990年、ブロニスワフを顕彰すべく、事実にもとづく記事数篇をヴィルノ紙に寄稿できたとき、忘却された英雄を受け容れるべく、関心の水門が開放されることを期待したものの、そのときに開かれたのは、筆者の両の腕(かいな)だけであった。

第一次大戦中のスイスで、ブロニスワフ・ピウスツキはポーランド・リトワニア委員会の委員を務めた。同委員会は相互理解を深めるべく設置されたが、双方がともに「理解」するポーランド語が媒介語を務めたことは特筆に値する。ブロニスワフは鎮静剤の役回りを務めた。彼は対話の進行役に徹し、双方に感情の暴発を許さなかった。にも拘らず、もしブロニスワフ・ピウスツキが今日、リトワニアの旅券を申請したとしても、到底取得できそうにないし、

ヴィルノの当局者は彼の名前の綴りに変更を迫るが如き、詭弁を弄するであろう。リトワニア人の心性が「ピウスツキ」という姓の響きに今なお神経を尖らせるのはなぜだろうか。われわれはただ理解に苦しむのみ。しかるに、われわれはブロニスワフ・ピウスツキを躊躇なくリトワニア人と断言できるか、という設問であれば、「否、この世では断言できない」という回答を承知している。

かくて、謎はいまだ解かれぬままである。近代国家が人民を腑分けするために使用する、明らかに厳し過ぎる基準で秤量するならば、ブロニスワフ・ピウスツキは、己を分類しようとするあらゆる努力をすり抜ける人物だった。人生の一段階ではオーストリア旅券を携えて旅したにも拘らず、ドイツ人ではなかった。彼はリトワニアに生まれたが、己の祖国の地元言語を喋る人々を己と同一視することはなかった。リトワニア人は、彼が改称せぬ限り拒絶するだろうし、私の感触ではポーランドの当局者も、完璧に別セットの原則にもとづくとはいえ、全く同じ願望を以って対処するように思われる。ではロシア人はどうだろうか。ロシア人らは、もし彼が彼らの帽子を被ってくれ、喪失した旅券の複製を彼に再発給でき、「ポーランドの陰謀」を仕組むことをやめさせて、「ヴィドヌィ・ウチョヌィ」にすることができたならば、まさに御の字であろう。遺憾ながら、ロシアが大昔から承知するように、この「陰謀」はポーランドの民族アイデンティティの核心に鎮座し、ポーランド人はそれを「仕組む」ことを決して諦めないであろう。したがって、彼をロシア人として分類したい人々に対する彼の回答は、「雌鶏は鳥にあらず、ポーランドは国境にあらず」というロシアの古い信仰にも拘らず、明確な「否」でなければならぬ。ロシア人の暴君好みと、ポーランド人の自由への憧憬は、和解させることができないのだ。

「温和な」(遺伝子を受け継いだ)ピウスツキ

1882年から1885年にかけて——実年齢では十五才から十九才まで——、ブロニスワフ・ピウスツキは「日記」を書き続けた。この「日記」は、当該時期の彼の家族生活を伝える掛替えの

ない情報庫である。「日記」の記載は、成長途上の若者の手になる代物だから、世界を見つめる彼の眼差しはほぼ日毎に変化し、記載内容は長さや話題、また思索の深さにおいても著しく変異する。これらの記載は総体として、彼の内面的思索や、彼の家族生活をめぐる紛糾を生々しく描出している。われわれは、彼がヴィルノであまたの親族と持った格別に頻繁な出会いをめぐって討論する際に、この「日記」を既に活用してきた。

「日記」はまた、若きブロニスワフや、彼の身内の者すべてに関する深い知見の頗る豊かな源泉でもあるから、それがなぜ、いまだに公刊されないのか、驚きを禁じえない。なかんずく、「日記」で使用されるのがポーランド語であるのに、それがポーランドにおいてさえ上梓されていないのは、なぜだろうか。筆者は十年前、ポーランドの古都クラクフにおいて、ブロニスワフ・ピウスツキを顕彰する飾り額を除幕するという栄誉に浴した。除幕式に引き続いて開かれた学術セミナーで、「日記」は遅滞なく上梓すべきことを、筆者は当路の人たちへ向けて訴えた。さて十年が過ぎたが、われわれは依然として当局者からの回答を待ち侘びている。今や、次のような議論を提起すべき機は熟した。ポーランドの現状は、ブロニスワフ・ピウスツキを認める覚悟があるのか、それとも、——リトワニア人のように——彼の周囲を盗み足で歩き続けるだけなのか、と。

幸いにもポーランドは、筆者がブロニスワフ・ピウスツキ「日記」の存在を公表すべく働きかけた唯一の国ではなかった。筆者は1990年代に、「日記」の全体を収録したマイクロフィルムを、サハリンのブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所宛に送付した。その結果として、「日記」の第一部(1882年)が筆者の編注も含めてロシア語で公刊された(*Izvestia Instituta nasledia Bronislava Pilsudskogo*, № 3, Yuzhno-Sakhalinsk 1999)。近年には、「日記」からのさらなる抜粋も、ロシア語に翻訳されて上梓された。ロシアは、ブロニスワフ・ピウスツキを己のものとなすべく、強力で不断の努力を重ねているようである。

われわれが上で知ったように、今日の官僚ら

が偏愛するような、粗雑な分類線の上を撫でる表面的分析は、たとえどんなに量を積み上げたとしても、ブロニスワフ・ピウスツキの現実の国籍・階級身分・公民権・政治信条・職業的地位をめぐる、熟議された判断を下すことはできないだろう。彼は、そのような分類に容易に屈するような、やわな男では全くなかった。したがって、範疇化に向けた無益な試みは断念して、彼の現実の人格により肉薄するような、別の視座から彼を眺めてみようではないか。彼の家族状況に格別な注意を向けて、その遺伝子構成の観点から彼を改めて見てみよう。そしてそのような情報は、日記の記載からわけなく入手する——あるいは、恐らく演繹的に推断する——ことが可能である。

われわれが既に暗示したように、ブロニスワフの両親——ユゼフ・ピウスツキとマリア・ビレーヴィチ——は、互いに極めて近い近親者であった。彼らの主要な関係線は、バトラー家の二人姉妹と、両姉妹の母マウゴジャタ・ビレーヴィチによってもたらされた。だが、ユゼフ・ピウスツキの祖母もビレーヴィチ家出身のアンナであったから、話がそこでは完結しない。世界中の大半の社会では、そのような近親者間の、やや近親婚的な配偶関係を強く非難する。ローマ・カトリック教会も、その大半の歴史では同様に非難したが、19世紀のリトワニアでは、正教会の帝政政府の差し金で反カトリック的財政・経済措置が実施された結果、近親婚すれすれの配偶関係が頗る多発して、ローマの教会当局も[やむなく]それを容認した。そのような配偶関係はカトリック教徒の貴族層へ、ロシア帝政による土地収用に対して一定の法的保護を供与したからである——この一件をめぐる、拙著 *Price of Conscience*, Saitama 2009 でやや詳しく論じた。

人類が近親交配に対して示す広範な非難の声は、結果として生ずる子孫が正常態からやや逸脱するという、観察可能な事実から帰納されたものである。この普遍的に受け入れられている真理は、今や科学でも検証されている。遺伝学の用語に直すならば、両親間の近親性は彼らの子孫に、幾つかの頗る重要な意味をもたらす。そのような配偶関係がその子供らへ引き継ぐ

遺伝子の遺伝子給源(ジーンプール)は、通常よりもはるかに小さくて、より濃縮されているから、「良い」遺伝子組合せもさることながら、「悪い」遺伝子組合せまでも頗る強度に誇張されるようになり、そのいずれかは優性となって、子孫にまで伝達されるわけだ。そしてまさにこれら優性遺伝子組合せこそ、その担い手の生涯に成功ないし失敗をもたらすものにほかならない。「良い」遺伝子組合せを有するのは結構なことながら、通常はその担い手に積極的な効果をもたらさない。例えば、インドで鼠捕獲業カーストの家に生まれ落ちた者にとっては、親の双方から途轍もない美声を授かってもほとんど意味がない。そのような「良い」組合せが、その担い手を歌手として成功させる機会は極めて乏しい。インドでは鼠捕獲者が歌うのを聞きたいと思う人がほとんどいないからだ。しかるに、「悪い」組合せはあまたの悪さをしでかす。例えば片親が聾の遺伝子を持つ場合、その子供らは聾者であることも、また聾ではないこともある。他方で、もし両親がともにそのような遺伝子を持つならば、その子供らは遺伝子の「厳命」によって聾者となるであろう。

両親が互いに近親者同士である家族では、この関係が子供らに及ぼす波及効果が過度に強調される傍らで、われわれはそのような配偶関係が両親自身に与える逆効果を忘れがちである。遺伝子由来の性的魅力(Genetic Sexual Attraction—GSA と略記)の存在は、——幼少時に別々の養親の許に引き取られたが、あまたの歳月が経過したあとで成人として再会を果たした兄弟姉妹に対する観察を通じて——ここ数十年間に見出されたばかりの現象である。その詳細に立ち入ることは避けて、GSA 原理は、例えば近親者に付与されるような、酷似する遺伝子クラスターを有する人々のかなり大きな部分が、相互に膨大な性的魅力を見出し、彼らのしばしば潜在意識的な欲望を抑止するのは、近親相姦タブーの日常的な圧力だけであることを示唆する、と要約しておきたい。タブーが緩い所では、GSA の配偶関係が顕在化する。だが GSA のコインの裏面は、そのような関係を樹立した人たちが、運命の命ずるありとあらゆる状況に対して、単に類似するだけではなくて全く

同一の反応を示すという傾向である。一組の双生児が同一の服を着て、全く同様に話し歌う限りでは、何らの問題も醸さない。しかるに、同じ一組の双生児が危険や不都合な状況に直面したとき、——選択肢のすり合わせや区々な対応の方がはるかにより適切な反応であるにも拘らず——彼らの咄嗟の反応が依然として完全に一致しているとしたら、それは完璧に由々しき事態である。ブロニスワフの両親はそのような配偶者として GSA 症候群に屈し、危険に対する一致した対応で苦しむなど、この現象の両面を露わにしていた。

そこで再び、ブロニスワフの両親のような至近の近親者を親にもつことには褒賞もあるが、それ以上に、支払うべき遺伝的代償もあることを想起すべきだ。頗る粗雑な「成功」の尺度を適用するなら、12 名の子供たちの内でブロニスワフ、ユゼフ、——1930 年代のポーランドで経済相を務め、のちには中央銀行総裁や上院副議長までも歴任した——ヤンは、成功を約束する遺伝子に恵まれた例外的な人たちだったことが判明する。しかし、その他の兄弟姉妹の何人かはさしたる成功も収めず、姉妹の一人と兄弟の一人は、心理学や社会学的な意味の障害を抱え、結果的には頗る惨めで不如意な生涯を送った。別の弟妹二人——双子の末子テオドラとピョートル——は不可解な状況下で、三才を迎える前に死亡した。一見すると「成功を収めた」ように思われる子供たちでさえも、のっけからほとんど乗り越え難い障碍に妨げられて、苦難と緊張に満ちた人生を送った。われわれがここで論じるのは、あらゆる人の運命につきものである幸運の無作為分布ではなくて、例えばブロニスワフに悲惨な人生を招来したような、遺伝子的に強勢化された性格特徴である。例えば、ブロニスワフの生涯を通して顕著に認められる「他の人たちのために良いこと——「良い」が含意することは目まぐるしく変化した——を行う」という度外れた傾向だが、この性格特徴はブロニスワフが父親から受け継いだもので、ひょっとすると、母親の遺伝子によって「強勢化」されたかも知れない。この性格特徴を付与された人たちは、しばしば「背中にプロペラをつけて生まれた」と評される。しかしながら、

役に立つことがしたいという(過)衝動には、行動を起こすことが全く不可能のように見える、完璧な無力期が折に触れて差し挟まれる。そのような無気力期は、この気質の本人にとっても、またブロニスワフのアイヌ配偶者チュフサンマや、彼らの二人の子供たちのように、この「善行者」に生計を預けた人たちにとっても、極めて危険なものとなりうるわけだ。このような行動パターンはしばしば遺伝子主導であるから、彼の両親たちも、またブロニスワフ自身も、この「プロペラ気質」やストレスに対する「起伏のある」対応には苦しんだようである。

突発性錯乱状態を示唆する多数の事例が、ブロニスワフ・ピウスツキの「日記」には記載されている。悲しいかな「日記」には、また GSA 症候群 (Genetic Sexual Attraction syndrome) の生々しい記載までも幾つか見出されるから、1930 年代に「日記」が上梓されなかった理由の一つは、まさにそれであった。しかし「日記」が執筆されてから百三十余年が経過した今、この途方もなく重要な歴史文書には、一般読者の手が届くように措置さるべき時が、間違いなく到来している。

さてこれからは、ブロニスワフ・ピウスツキの親族で頗る特別なカップル——彼の両親——に注目してみよう。1883 年の春、ブロニスワフの両親は人生の絶頂期にあって、忍び寄る災難を彼らに予告するには、勇敢な占い師が必要だったろう。母親は四十才、田舎に幾つかの領地——総面積は 1 万 5 千^{ヘクタール}を優に超える——を所有し、12 人の子宝にも恵まれて、末子の双子は生後僅か数ヵ月だった。父親は五十才、機智と魅力に富んだ男で、極めて好評な数々の小品の作曲者、しかも高等教育を修めた郷紳で、妻の領地を差配する管理人でもあった。一見して、落ち着いて持続する家族の繁栄の行く手を遮るものは、何もないように思えた。だがまさにそのとき、災難が襲った。

まず第一に、ブロニスワフは、ヴィルノの学校当局が彼の進級を認めるか否かをめぐって、深刻な疑惑を抱き始める。そのような通過証がないと、彼にはギムナジヤでの学業継続も、大学進学も覚束なくなるであろう。(ブロニスワ

フには知らされていなかったが、地元の学校当局はヴィルノに今一つのギムナジヤを設置することを計画していた。彼らはプロニスワフの学校における生徒数削減を望む傍らで、同時にまた、別の学校の教室を補充するための生徒たちも必要としていた。結果的に彼の進級問題が割を食って、新設校の教室の埋め草として、ロシア人生徒よりもむしろポーランド人生徒に目を付けた、教師たちの背中を押したのは明らかである)。

第二に、1883年の春には、彼の人生に今一つの進展がみられた。彼の女性に対する関心が突如として芽を吹いたからだ。プロニスワフは、前日街頭で出会ったあれこれの少女の品定めしに没頭しだして、その夜は狡猾な計画を以て、路上で覗き見をすることもできた。彼はしばしば、学業にもっと時間を割く必要は認めながらも、彼のロマンチックな関心の方が、常に勝利を収めていた。

第三には、まさにこの時に、彼の家族の全体状況に向けて、突如、逆風が吹きだした。1865年の皇帝「勅令」が強制導入した反カトリック措置は、現金資金の確保との恒常的な闘争を意味したが、1883年は、この闘いでピウスツキ家が敗者となることを印す運命の年であった。銀行は彼らにもはや融資しようとせず、また割賦金の一括返済も求めて、彼らは強いられた破産へと追い込まれた。それに並行して、田舎にある領地も、各種の管理人・醸造工場長・借地人・転借地人が経営していたが、両親と12人の子供に加えて、およそ12名の家内使用人も抱える大所帯の、家計を支えるのに十分な現金を届けて来なくなった。不誠実な管理人らに対するあまたの訴訟案件——請求総額は数千ルーブリにも上った——は係争中だったから、いまだ鏹一文ももたらさなかった。確かに、大荷馬車隊が肉、野菜やその他の農産物を満載して、至近のゾーウフ領地から折に触れて到着していた。その際は、プロニスワフの母親が肉を包んだ大型荷物を、さまざまな親族や知人——主治医の家族はいつも最上等の肉を受領していた——らへ発送せねばならなかった。肉は容易に痛みだすからで、当時は冷蔵庫も冷凍庫もなかったことは改めて言うまでもない。これは偶

発事であって、物々交換タイプの経済だった。肉は——いまだ潤沢にある間は——現金ではなかったから、銀行に残された彼らの割賦金をこれで返済することはできなかった。

かてて加えて、事がうまく運ばず、——例えば、支払いを滞らせた田舎の借地人の解雇のような——何らかの思い切った決断を下すべき時が来ると、プロニスワフの母が望むことと、彼の父が賢明と考えることの間に深刻な食違いが現れる。この口論の只中で、彼らの現金資金が完全に枯渇して、プロニスワフの今後の教育問題は解決されなかった——事態は明らかに、学校の上席管理者へ向けた高額な賄賂を要求していた。要するに、彼らの家族の幸福に関してかなり根底的な、幾つかの論点が集積しつつあって、決断を迫っていた。

それはあたかも、忍び寄る災難は、プロニスワフの両親たちの所業ではなかったかのようである——とはいえ、彼の「日記」ではその咎を、断固として父親だけに負わせているが……。前にも述べたように、悪評高い「1865年12月10日勅令」は、ローマ・カトリック教徒の貴族層に、彼らの相続領地の賃貸ポテンシャルの全面活用を停止させることを狙ったものと解された——一方ではまた、非相続地の所有も彼らには全く許されなかった。実務面では、カトリック教徒の地主たちが時折、「勅令」が意図したような悪魔的論理を通して、金繰りで少なからぬ難題に遭遇することを意味していた。融資はお好み次第、ヴァーチャル・マネーやデリヴァティブが至る所で取引され、不要な破産を回避する特別策が考案される今日では、家族経営の企業が、その市場価値は負債額の何倍も上回るにも拘らず、現実の資金繰り問題で右往左往するなどとは、想像することさえ困難だ。しかしながら、ローマ・カトリック教徒らが土地を所有した1884年のロシアの小さな部分では、資金繰りの行詰まりが、ピウスツキ家の家族企業に「完済か」「破産か」の二者択一を迫ることを意味していた。

プロニスワフの両親たちが、自らの身に降りかかったさまざまな破局の織りなす、不吉な蜘蛛の巣に対して見せた反応は極めて衝撃的だった。そこそこ若くて、それまでは元気で健康

だった二人が、不可解で強烈な脚痛を同時に訴えだして、その結果、痛みをこらえて署名を済ませるや、ほぼ一昼夜寝台に籠った。ブロニスワフの「日記」は、痛むのがどちらの脚——左か右——か、そしてまた脚のどの部分か、を明記していないにも拘らず、それは極めて驚愕的で悲しい情景を描写している。彼の父と母は立て続けに数ヵ月も、昼夜を分かたず寝台に籠り、見るからに恒常的な脚痛に耐えながらも、使用人や年長の子供ら、そして別々に高々三名の医師にも付き添わせていた。両親の一人は時々、高々三名の介護者に支えられて「薬」浴を行ったが、その際、介護者らは彼ないし彼女を浴槽まで運び、またそこから運び出した。両親は衛生的理由のためですら、ベッドを離れようとせず、彼らがブロニスワフと話すことを希望したときは、彼が枕元まで呼びつけられた。両親が果たして、互いに話を交わしたか否かは、「日記」の記載からは判断が難しいものの、彼らが互いに叫びあったか、あるいは、彼らのそれぞれの寝室を隔てる廊下を越えてメッセンジャーを送ることは、極めてありえたであろう。

診察に当たった医師たちは彼らの病因の見立てで、ほとんど困惑する。医師らは患者の病状に対して妥当な診断が下せなかったからだ。表向きの診断は「神経性疾患」とされたが、つまり病理的原因は何も発見できなかったことを暗黙に容認したに等しかった。「神経性疾患」は、今日の言葉遣いに直すと「神経症」か「心身症」、即ち、専ら患者の心理状態が惹起する身体の疾病と翻訳されよう。最も簡潔に述べるなら、患者の精神が日常生活に耐えられぬような段階にまで立ち至ると、彼ないし彼女の身体は、伏在する「心」の病の発露として、明示的な病理的徴候を発現するわけだ。

換言すると、ブロニスワフの両親たちは、己の前に立ちはだかる難題には解決策のないことを潜在意識で悟るや、「脚痛」を装って悲鳴を上げたのだ。そこで問題は、その悲鳴を聞いた人たちが、彼らを取り巻く人々——相互に結びあうピウスツキ・ビレーヴィチ・バトラー一門のメンバーたち——が、自らの遺伝子構成のせいで、ピウスツキ夫妻のものに酷似する方法で、そのような状況に対処した公算が頗る大であ

ることだ。バトラー家の姉妹たちの一人である祖母のテオドラは——マリアやユゼフと同時に——急性失明症を両眼に発症して、数ヵ月間は何も見ることができなかった。この失明は、彼女の息子、即ちブロニスワフの父親が己の謎の病から回復したのちに、ようやく消失した。

ピウスツキ家の状況は、身体の病を治すのが本務の人たち——ほかならぬ医師たち——によっては、救われるよしもなかった。医業は、何よりもまず診断の手続きにかかわる。ブロニスワフの両親らの疾病の根源的原因を、自らの職業的知見を以てしては突き止められなかった医師らは、それを治療すべき糸口も全く持ち合わせなかった。一人の医師が、患者は何が何でもベッドに留まるべきだと主張すると、別の医師は散歩と新鮮な空気こそ求められる治療だ、と互いに譲らなかった。しかるに数週間が経過すると、彼らは立場を交代して、母親を寝台に縛り付けることを望んだ医師が、今や外出してなるべく歩くよう勧める傍らで、別の医師は己の信念にもとづいて、患者はベッドを全く離れるべきでない、と今度は言いだす始末だった。

この大混乱に紛れてブロニスワフの教育問題は適切に解決されず、彼は原級に留められただけでなく、転校して前年度のコースを再履修せねばならなかった。公正を期すならば、彼の男としての欲望は充足された。彼は、田舎の領地で使用人の少女たちを相手に「それをする」よう母親から助言されたからだ。これらの領地の経営は悲しいかな放置されて、管理人らの胸先三寸に委ねられた。銀行債務の皆済期限が来ても、ブロニスワフの両親たちからは何の反応もないままに過ぎていった。破産処理が必至と思われたとき、ピウスツキ家の田舎の領地に隣接して所領を有する隣人が、銀行と掛け合って新たな条件を設定すべく、わざわざヴィルノまで駆けつけてくれて、それは辛うじて回避されることとなった。ブロニスワフの両親はいずれも、交渉の全経過を通してベッドに籠り通した。

そして1883年9月29日がやって来た。その日、ヴィルノの町は悲しくも痛ましい光景を目撃する。ピウスツキ家の新しい住まいへの引っ越しが進行していた。午前10時、ロシア兵の特別班が母親を軍用野戦担架に載せて、町を縦

断しつづであった。担架を手配したのは、彼女の担当医の内で陸軍医療部隊内にポストを有する医師だったが、一年以内には彼女の義理の息子となるであろう。四時間後には、父親の担架が同じルートで運ばれた。プロニスワフは「日記」に、「父さんは他の人たちの手前、痛みを訴えて溜息を吐き、普段より頻繁に脚を抱えつづけ、母さんも末期的病状ではないことが判った」と記している。プロニスワフは「奇怪なる引っ越し」騒動に屈辱感を覚えた。

われわれがここに見るのは、極めて目立つ舞台で演じられた遺伝子の近親交配の否定面である。二人の主演を含む三名が、各自の役を演じることを完璧に不可能とするような、同一愁訴を一斉に発現する。出演者の全体にパニックが走る。だがアメリカ人も言うように、ショウ(人生)は続けなければならない。プロニスワフの両親たちが罹っていた病が何であれ、それが彼らの意思を完璧に麻痺させ、現実との接触をかなり喪失させたことには、全く疑問の余地がない。この疾病は近親婚の結果であるが、両親の危険に対処する生得的遺伝子メカニズムを災難が襲ったとき、父母の双方にはまさに瓜二つの症状が出来し、一旦暴発するや、それは彼らをして同時にベッドカバーの中へ潜り込ませ、「脚痛」も発症せしめたのだ。もし彼らが二つの別々の遺伝子給源に由来していたならば、彼らのそれぞれの反応も互いに異なっていたであろうから、結果として、彼らの内の少なくとも一人は十分な闘争心を具えて、家族の不幸を回避することもできたであろう。

町を縦断する忌まわしい引越しから二ヵ月が過ぎた頃、プロニスワフの父は、ベッドを離れて外出する勇気を見出した。「彼は五分後に戻って来た」と、プロニスワフの「日記」は記している。結局、父親は再び歩き出したが、母親の病は長引いて、悪化していった。彼女の脚にできた傷口が、痛みを倍加させる。地元医師三名が然るべく診断できなかったため、——ヴィルノから400^{キロ}も離れた——遠方のワルシャワから一人の医師がわざわざ招かれる。この招聘に要した費用は500ルーブリで、その額は、ピウスツキ家が1882年にアパートの年次賃貸料として支払った550ルーブリにほぼ匹敵する——

今日のロンドンでは同様のアパートの年間賃貸料がおおよそ2万1千ポンドで、ヴィルノではその半額だとすると、件の医者への往診費用は、現行通貨で掛値なしの1万5千ドル!と見積もることができる。1883年11月5日、ピウスツキ家の居間において手術が執行された。ワルシャワの専門医——1分当たり[の謝礼]750ドル——が二人の地元医師——それぞれに1分当たり37.5ドル——の介添で執刀し、プロニスワフの祖母の一人が四本の蠟燭を掲げて手術場を照らす中で、それは20分を要した。プロニスワフが「ばあちゃん」と呼ぶ六人の女性の内の、誰が蠟燭を掲げたのかは不詳である。照明担当者は、きっとミハウォフスカ「ばあちゃん」——プロニスワフの母方の祖母——であったろう。一時的に視力を喪失した彼女の姉妹——ピウスツカ「ばあちゃん」(1886年に死去)——は、台所に座り込んで、手術の間中祈り続けていた。

少なくともさらに五人は、居間にいたか、あるいは戸口から手術を見守っていた。これは患部が足であったことを物語る。その当時、足から上の部分は一切が淫らなものに見做されていたから、[もし患部がそこに所在した場合は]何人と雖も手術の「現場」に立ち会うことは許されなかったであろう。手術はとどのつまり、さほど高くつかず、切開が施され、数本の排液管が挿入されると、それで一件落着だった。著名な専門医は明らかに、患者の身体面にはさしたる異状も発見できなかった。痛みの原因は「神経を圧迫する潰瘍が惹起する事実上の関節炎」であると初めて診断した専門医は、翌日、ワルシャワへ戻った。母親の高熱は、術後に間もなく収まるはずだったが、そうはならなかった。彼女の痛みは増し、傷口も腐敗を亢進させて、さらなる高熱と、より頻繁な発熱が続いた。困惑した医師らは、彼女の痛みを除去すべく、一日に強いヴォトカー一瓶を服用させるという妙案に思い至る。母親は賢明にも、処方量の半分だけの服用を受け容れたが、この相当量のアルコールの日常的摂取にも拘らず、痛みは一向に緩和される気配がなかった。旬日を措かず、医師らは、当時にあつて痛みを克服する効果が知られていた唯一の薬剤——モルフィネ——の採用に踏み切る。モルフィネは患者の静脈へ直

接に注射されるのだ。ブロニスワフは、ほとんど毎日のように「医者を迎えに」遣られることを、「日記」に記録している。医者を訪ねる際に告げられる理由は無論毎回同じで、痛みの亢進だった。しかしながら、彼の母が実際に求めているのは、もう一本の注射であって、医師はさらなる薬剤投与のために呼ばれ続けた。モルフィネの現名は「ヘロイン」であり、これまでに製造されたものでは、習慣性と興奮性の最も強い麻薬の一つとして、世界に周知されている。ヘロインの濫用は、すべての常用者の家族関係を破壊することがほとんど避けられず、とどのつまりは常用者本人の身も破滅させる。

1880年代の医師らが、モルフィネ投与に際する適正措置の設定に関して然るべき知識を欠いていたことは疑問の余地がなく、公正を期するならば、彼らとても適正量の判断をめぐっては、患者の認識と大差がなかった。ブロニスワフの母——早くも1883年3月にはモルフィネ注射を開始していたことが知られている——は、間もなく完璧な薬物依存状態に陥ったはずである。これは、精神状態の激烈な起伏、現実との頻繁な乖離、間断なく繰り返される薬物への渴望と連動していたに相違ない。この依存状態が運動の欠如や恒常的な寝台暮らしを伴ったことも想起するならば、彼女の健康が釣瓶落としに衰えていったと聞いても格別な驚きはないであろう。結局、彼女は生ける屍となって、新鮮な空気に触れるべく、折に触れては表に連れ出すだけであつた。1884年7月28日(土)付のブロニスワフの「日記」は、「早い夕食のあとで、僕らは母を庭園に連れて行った。(医師の)主張にも拘らず、母は益々調子を崩し、神経質にもなって寒気を訴えだしたから、五時過ぎには家へ連れて戻った」と記録していた。

1884年の9月初旬、マリア・ピウスツカは永眠する。享年四十一才であつた。究極的な死因は自殺だったとする強力な状況証拠が存在する。キリスト教徒にとって自殺は、赦されることのありえぬ重罪である。何とならば、生命を与えるとともに、生命を唯一奪えるという神の最も根源的な権限をそれは否定するからだ。ヴィルノの地元神父はマリアの臨終の床での立会いも、終油儀式の執行も断った。自殺は、カ

トリック司祭が死にゆく人間への訪問を拒否できる、ほぼ唯一の事例である。もしマリアが自然死を遂げたのであれば、司祭がその臨終の儀式を断ることは、まずありえなかったであろう。マリアの地元教会はヴィルノ大聖堂だったが、自殺者を聖地——地元墓地——に葬ることはできなかったからこそ、ブロニスワフの母の遺骸は、ヴィルノから、田舎にある一家の領地スギンティまで運ばねばならなかったわけだ。この当時、それは霊柩馬車で二日ほどの旅を意味した。スギンティではマリア・ピウスツカが、一家の礼拝堂の庇護者も兼ねる、荘園領主の肩書を有していたから、地元の神父はそこでの彼女の埋葬を誰も断ることができず、彼女は実際に、ほぼ同じ頃に死んだ己の最末子二人とともに、礼拝堂のすぐ脇に葬られた。

マリアの自殺は、やはり比較的弱齢で世を去った彼女の母ヘレナ・ミハウォフスカの記憶をも甦らせる。ヘレナの生と死にかかわる文書記録は、当面、その存在が知られていない。しかしながら、少なくとも一人の消息筋は、彼女が「結核」で死んだと述べているが、真偽のほどは定かでない。マリアの父親の彼女に対する態度——彼は彼女を見捨てた——や、マリアが母の主要な荘園——8,000 モルを擁するズーウフの領地——を相続した際の経緯をめぐっては、さらなるミステリーも存在する。第二次大戦以前の歴史家たちが記したところによると、この領地は恐らくミハウォフスキ家から受け継いだものとされていたが、実際は全くそうではなかった。19世紀にあつては、若い人々の死を「結核」に帰することが「流行(はやり)」であつた。キリスト教国では自殺がタブー視されて、公に口にすることもできなかったからだ。少なくとも消息筋の一人が、マリアの自死を「臀部結核」に帰せられると語ったことは、注記に値する。われわれが、1883年11月の彼女の脚部手術の状況から判断する限り、手術中に尻——当時は身体で最も淫らな部分だった——が触られることなど、金輪際ありえなかったが……。

もし結核でなかったとすると、マリア・ピウスツカの死は、彼女の麻薬常習に帰せられうるだろうか。そのような説明は過度の単純化であろう。ヘロイン中毒者は概して、己自身の命を

絶つことよりも、周囲の人たちに危害を加える方にむしろ熱心である。彼らの自殺率は必ずしも高くなく、どんな代償を払っても、むしろ生に執着しようとする。もっと適切な説明は、マリアの遺伝子構成に求められるであろう。そのようなアイデアがたとえどれほど非常識であれ、ある種の人々には自殺の素質が具わっているように見えることが知られている。このアイデアを検証するには、糾合したピウスツキ・ビレーヴィチ・バトラー一門の内部に出現する、近親交配の遺伝子的諸特性の話に立ち返らねばならない。マリアの母の死は「結核」の仕業かも知れぬが、また——「ロマンチックな時期」の若い人々の間で今一つの代表的な死因でもある——自殺の結果だった可能性もありうるわけだ。もしそれが事実だとすると、自殺を志向する性向は、母(ヘレナ)とその娘(マリア)の双方の遺伝子構成の中に潜んでいたであろう。さらに言えば、もしマリアが「自殺」遺伝子のキャリアであったとすると、遺伝子的には彼女に近い親族——uncle-cum-husband [=オザにして夫、つまり、プロニスワフの父ユゼフ・ピウスツキを指している]——も、やはりそれを受け継いでいた公算は極めて大であり、この遺伝子が彼らの子や孫たちの間に——顕著に強化された姿で——出現する確率をはるかに増すであろう。これが、近親交配のもとらす「悪しき」副作用の一面である。

鬱状態や精神不安定は、お決まりのように、自殺としばしば手を繋いで人間社会に登場する。これらの遺伝子特性はひょっとすると、同じ遺伝子クラスターの相異なる組合せとして受け継がれるのかも知れない。図1は、マリ

ア・ビレーヴィチとユゼフ・ピウスツキがもうけた子孫たちの間に見出される、自殺や躁鬱傾向の分布を示している。この図はすべての事例を網羅するものではない。多くの子孫らの情報は現在も入手が叶わず、したがって、図1には反映されていない。その他数名の子孫については、入手された情報が不十分で、専門家による推測さえ至難の業である。同図に収録された諸個人は、なかならず、これら子孫の名が特定できぬよう配慮してある。それゆえ彼らの性別や、その他の個人を特定しうるような諸特徴は伏せてある。同夫妻の子供たちでは10名が成年に達したことが知られるにも拘らず、本図に登場するのは、そのうち僅か7名に過ぎぬ事実にも留意されたい。マリア、ユゼフ・ピウスツキ夫妻は、子供・孫・曾孫を合わせると、全部で43名を有し、そのうち40名が成人に達したことが知られている。

図1からは、マリア・ビレーヴィチとユゼフ・ピウスツキの子孫たちが、異常に高い頻度の鬱状態と自殺傾向を示したことが読み取れる。7系列の出自のすべてに不穏な諸特性が認められ、分析の対象となった17名中14名は世渡りで深刻な障碍を抱えた一方で、4名は生存のための闘いを完璧に諦め自死を遂げたことが知られる。(「曾孫2a」という子孫は、医学的知見の進歩のお蔭で、二度にわたる自殺の試みを辛うじて生き延びた。百年ほど前であれば、これらの試みも未遂に終わることはなかったであろう。なお、筆者はこの情報の公開に関して、関係する人物より完璧な承諾を得ている)。

プロニスワフ・ピウスツキの人生遍歴を慎重に追跡する方であれば、二十年前の拙稿を記憶

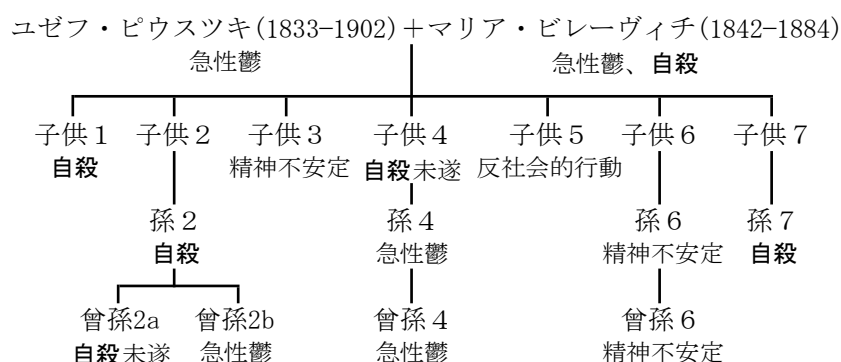


図1 自殺や躁鬱の諸傾向

しておられよう(ヴィトルド・コヴァルスキ「ブロニスワフ・ピウスツキの遍歴——日本出国から自殺まで」『ポロニカ』4:38-53、1993)。ここでは、パリのセーヌ川で1918年5月に出来たブロニスワフ・ピウスツキの自死の状況を明らかにした。彼をそこまで追い込んだものがまさしく何であったかをめぐっては、あまたの憶測がある。今回、上で試みた家族史の分析は、彼の行動に対して最も正鵠を得た説明を与える。このような死を予めブロニスワフ・ピウスツキのために用意したのは彼の遺伝子構成であって、彼は遺憾ながら、己の定めを遂行したわけだ。ブロニスワフ・ピウスツキの死に様は、およそ三十一年前に彼の母親がたどった道を正確になぞるものだった。彼も「この世と訣別」すべく、医者注射を依頼し、まさに母親同様に誤診され、また病状も過小評価された。専門家の助けが期待できぬと悟るや、自ら「この世」に別れを告げたのだ。ブロニスワフの遺体がセーヌ川から引き上げられると、彼の友人や賛美者たちはパリの大寺院での盛大な葬儀を企画する。この告別ミサは、彼の死に様をめぐるニュースが教会当局の耳に達するや、取り消された。荘厳な葬儀の代わりに、彼の遺骸はパリ郊外のモンモランシーにあるポーランド人墓地へ運ばれて、かなり簡素な方法で埋葬された。

1991年、当時の大統領府長官秘書官から筆者に電話が入り、ポーランド国家がブロニスワフ・ピウスツキの遺骸を再埋葬するべく、モンモランシーからワルシャワへ公式に移すこと

を当方は望むか否かと訊ねられた。私は「その必要は全くない」と答えた。実際に、そのような必要はなかった。ブロニスワフ・ピウスツキはその生涯を通して、己をある特定グループに分類し、他グループはすべて排除するような目論見に一切与ることがなかった人物である。彼は自由な精神の持主であり、形式主義には全く囚われずに次々と越境していく小鳥であった。彼はしばしば空きっ腹を抱え、時には旅券も携えぬ永遠の文なしながら、雨が降ろうと雪が降ろうと、着古したスーツと薄めのコートだけの着た切り雀で旅を続け、英国を経てガリツィアに至り、その後はフランスに数ヵ月滞在、さらにベルギーやスイス、そして再びフランスを駆け抜けた。彼はリトワニア人であるとともにポーランド人でもあり、ロシア人であるとともにまたドイツ人でもあり、ヨーロッパ人でも、またアジア人でもあった。ワルシャワはもはや彼にとって、ヴィルノやクラクフやルヴフ、あるいはサハリンのアイ¹やフランスのパリ以上に、己が夢を託せる国の首都ではなかった。

一言でいえば、ブロニスワフ・ピウスツキは地球人(グローバル・マン)であった。何人であれ、彼の心を乱すがごときことはさせまじ。

R.I.P. ——安らかに眠りたまえ。

尽きせぬわが息
墓²の子らを充たせ
憂き世の水よ

¹ 南樺太東海岸にあるピウスツキ所縁のコタン。

² 「墓」はマリア・ピウスツカの実家、ビレーヴィチ家の紋章である。その図柄は、南北方向に設置された墓で、外側の三面に十字架が一個ずつ配されている。

この三行詩を、正則の俳句として邦訳せよとのコヴァルスキ氏の注文ながら、訳者の力不足で字余りとなってしまった。乞、御寛恕——訳者記。

* Author & title: W.Kowalski, “The making of a Global Man. Who and what was B.Pilsudski?”